



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第8代理事長に就任して

理事長 加藤 博之

目次

- 第8代理事長に就任して
- 理事長の任を終えて
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- 平成30年度 各種委員会委員
- 監事紹介
- 女性医師支援WG始動
- 女性会員アンケート調査結果報告
- お知らせ
- 編集後記

この度、平成30年4月25日に開催されました総会におきまして理事に選任され、同日に開催されました臨時理事会で第8代理事長にお選びいただきました。どうぞよろしくお願い致します。もとより浅学菲才の身ですので、理事の皆様、委員会委員の皆様、会員の皆様のご支援がありませんと、日本手外科学会の方向性を決めていくことはできません。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。私の大学教授としての残りの任期は1年を切っており、教室や大学の業務は縮小させていただきましたので、エフォートの第一を日本手外科学会の発展に尽くしたいと思っております。

現在の日本手外科学会が取り組む課題の第一は、手外科専門医制度を現日本専門医機構が認めるサブスペシャリティ専門医として確立することです。これまで日本手外科学会が独自に練り上げた専門医制度は、既に900人を上回る専門医を認定してまいりました。しかし、この制度は旧日本専門医制評価・認定機構が認めたものであります。一方、現日本専門医機構は、今年から整形外科、形成外科などを基本診療科とする専門医制度を発足させました。次は、いよいよ基本診療科の上に位置するサブスペシャリティ診療科の専門医制度が開始される番です。今年の9月末までに、手外科専門医申請の書類を機構に提出するという話しも出ております。整形外科、形成外科が一丸となって育んで来た手外科専門医の道を絶やす事の無いよう、対応する所存です。役員の皆様には急なお願いをすることがあるかと思いますが、周到な準備のため、どうぞご支援ご協力をお願い申し上げます。

次の課題として、手外科の社会的認知を挙げさせていただきます。現在、整形外科、形成外科学会の中では、手外科は長い歴史のあるスペシャリティとして認知されています。しかし、国民の認知はどうか？手根管症候群、弾発指、橈骨遠位端骨折など比較的頻度の高い疾患、外傷に罹患した場合、手外科医受診を思い浮かべるでしょうか？手外科専門医制度の確立と同時に手外科専門医の存在を社会にアピールするよう運動が必要と感じております。そのためには、「広告のできる専門医」としての許可を得ることが最も有効です。この目標は、日本手外科学会代々の理事会の悲願でありました。引き続き尽力してまいります。

米国手外科学会 (ASSH) から日本手外科学会の主導による第7回日米手外科合同会議の開催を提案されております。前々回の第5回合同会議は日本手外科学会により準備を重ね2011年3月26日～29日ハワイでの開催予定でしたが、直前に東日本大震災があり開催を断念しました。2020年か2021年春にハワイでの開催に向けて、国際委員会が中心となり準備を始めたところであります。形成外科の先生も含めて、多くの会員が是非参加したいと魅力ある会議にしたいと思っております。

その他、手外科会員数の頭打ちを打開、女性手外科医のキャリア支援、別冊Hands Now刊行の継続化、会員管理システムオンライン化への円滑な移行、教育研修会のカードシステムによる単位取得、症例登録システムなど進めなければならない事業が山積しております。

これらの事業を進めるためには、皆様からの応援と協力が必須と考えておりますので、ご協力ご支援をお願い申し上げます。

理事長の任を終えて

前理事長 矢島 弘嗣

(市立奈良病院)

本年4月に京王プラザホテルで行われた学術集会の終了をもちまして、日本手外科学会(JSSH)理事長の職を全うすることができました。主任教授でもない私のようなものが4年間理事長をさせていただきまされたこと、本当に身に余る光栄と思っております。これは、落合前理事長、鈴木前副理事長、田中副理事長、そして三上副理事長をはじめ、理事、監事の先生方の支えがあったから何とかやっていけたものと、執行部の先生方に深く感謝いたします。また代議員の先生方、そして名誉会員、特別会員の先生方にもいろいろと助けていただき本当にありがとうございました。

この4年間、総会のあり方、進め方に関しては宗像弁護士からいろいろと助言をいただき改革することができました。一部定款の変更に関しても皆様のご理解を得て施行することができました。これにより整形外科と形成外科がより信頼の深い関係になったのではと思っています。2015年3月末にマウイ島で開催された第6回日米合同手外科会議で日本代表として挨拶をさせていただき、そして2016年9月にオースティンで開催された第71回米国手外科学会(ASSH)においては、JSSHが2度目のGuest Societyに選出され、Neil Johns会長からトロフィーを授与されたことは、理事長としてだけでなく、私個人としても最高の幸せを感じた出来事でした。その後国際委員会においては韓国との交換トラベリングフェローを開始し、台湾やシンガポールとの準備を進めているという活動を行っており、JSSHのさらなる海外展開を進めていく布石になるものと思っています。ただ理事長在任中に津下先生がお亡くなりになられたことは本当にショックでしたが、編集委員会の尽力で田島賞、津下賞を制定し、最初の受賞者を表彰できたことは、若い手外科医にとって非常に高い目標になるものと信じています。またザイアフレックスや人工手関節など、手外科専門医の価値を高めることに関しても一定の仕事ができたのではと考えています。しかしながら、もともと専門医を確固たるものにするために落合理事長から引き継いだわけですが、残念ながら日本専門医機構の内部の問題で、サブスペシャリティに関しては停滞しているのが現状です。そろそろサブスペシャリティに関しても日本専門医機構としてのアクションが開始されそうですので、これに関しましては次の執行部の先生方に最優先事項としてお願いしたいと思っています。このようにやり残したことも多々ありますので、これらに関しましては加藤新理事長よろしく願いいたします。

最後になりますが、この4年間理事長として支えていただいた日本手外科学会会員すべての先生方並びに無理ばかり言いつつもしっかりと対処していただいた事務局(コングレ)の方々からお礼申し上げます。そして今後の日本手外科学会の益々の発展を祈念して、私からの最後の挨拶とさせていただきます。

副理事長に就任して

副理事長 亀井 譲

(専門医資格認定委員会担当)

この度、平成30年度副理事長に就任しました名古屋大学大学院医学系研究科機能構築医学専攻運動・形態外科学講座、形成外科学教授亀井譲です。日本手外科学会の皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、昭和59年に名古屋大学医学部を卒業し、厚生連加茂病院(現豊田厚生病院)、静岡済生会総合病院にて外科研修をした後、平成元年7月に名古屋大学形成外科教室に入局させていただきました。組織移植の面白さ、マイクロサージャリーの奥の深さに興味を持ちこれが私のlife workとなりました。平成5年には愛知医科大学形成外科に赴任し、四肢熱傷後の瘢痕拘縮に対する形成術や、切断指の手術を行ってきました。その間、テキサスのMD Anderson Cancer Centerの形成外科に短期留学をさせていただき、頭頸部再建、乳房再建、さらには内視鏡手術を中心に勉強させていただきました。平成6年9月には岐阜県立多治見病院に赴任し、外傷をはじめ一般病院における形成外科診療を経験させていただき、平成10年4月に形成外科講師として、名古屋大学医学部形成外科学教室に戻ってまいりました。大学に帰局してからは、各種領域における再建術、特にマイクロサージャリーを利用した遊離皮弁移植をより安全に行うべく、移植床血管の求め方について工夫をしてきました。特に下腿における外傷後の再建では、大網を利用することで、これまで80%の成功率であったマイクロサージャリーを90%以上の成功率に成績を向上させてきました。また、腹部外科の経験を生かし、腹腔内組織による再建術、特に大網を利用した新しい再建術や研究を行い、現在も教室のメインテーマの一つになっております。

学会活動としては日本形成外科学会常務理事をはじめ、日本マイクロサージャリー学会理事長、日本頭蓋底外科学会理事など、他領域の先生方との連携で形成される学会においても活動をさせて頂いております。現在、新しい専門医機構により基本診療科の専門医制度が確立され、今年度は、サブスペシャリティーの専門医制度が確立されることになりました。本学会も整形外科学会と形成外科学会の両学会の上に立つ二階建ての学会として認められれば、専門医機構のもと、専門医制度を確立させる必要があります。研修体制、研修基幹病院、そして専門医更新制度などを整備して、手外科学会にとって有用な制度づくりに寄与したいと思っております。もとより浅学非才の身ではありますが、日本手外科学会発展のために全身全霊で献身していく所存でありますので、今後とも諸先生方には温かいご支援と、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



副理事長 平田 仁

(財務委員会、オンラインジャーナル別冊運用委員会担当)

昨年第60回日本手外科学会を担当させていただき、手外科医としての一定の達成感も感じることができ、個人的には本学会における一通りの関わりを完了したとの認識であった。しかし、手外科学教室を主催する立場で手外科、更には医学という枠を超えて幅広い領域の研究者と国際的に交流する機会も増えており、その立ち位置から今日の日本手外科学会を俯瞰すると何かやり残したことがあるように思われ、再度理事に立候補をさせて頂いた。4月の第1回理事会で加藤新理事長より財務担当の副理事長に任命していただき、現在はその重責を担うべくこれからはすべき役割に思いを馳せている。

私はこれまでに3期に渡って日本手外科学会の理事を務めさせて頂いた。三浪先生、佐々木先生、落合先生が理事長であったが、それぞれ全く異なる環境・目標を掲げて日本手外科学会が激動している時期であった。三浪理事長のもとでは日本手外科学会の財務改善が喫緊の課題となっており、そのためには諸般の事由により機能停止状態にあった事務局委託先を現在のコングレに移し、また、財政負担が異常に膨らんでいた学会雑誌運用コストを根本から見直す必要に迫られた。同時に中村理事長時代から始まった標榜科認証という課題への動きが本格化した時代でもあった。事務局移転を完了し財務改善に一定の成果を挙げて三浪理事長が退任されたあと、佐々木理事長の元で専門医制度確立の動きが本格化した。その後破綻することとなる旧専門医機構と厚生労働省の足並みの乱れたガバナンスの中で方針が二転三転する中を、複数領域に跨る建て付け、あるいは基盤学会間の合意調整など、極めて厳しい要求になんとか答えつつ、他に先駆けて基準に従った形での専門医制度をスタートさせることができた。落合理事長時代はガラス細工のような、ともすれば容易に瓦解しかねない手外科専門医制度を更に昇華させ、頑健なものとするための苦しみの時期であった。その後矢島理事長の時代を経て手外科学会は他に類を見ない充実した複数領域に跨る本格的なサブスペシャリティとしての地位を固めることができた。

こう振り返ってみると過去10年余の学会の歩みの大半は組織改革にそのエネルギーを集中しており、意識の大半が国内に向けられていたと言える。そろそろ我々は視線を日本の外に向け、自らの立ち位置を振り返る時期に来ているのではなかろうか。多くのパイオニア精神に満ちた先建の比類なき努力のおかげで嘗て日本手外科学会には世界から羨望の眼差しが向けられていた。しかし、過去10年を振り返るとパイオニア精神が衰退し、内部の安定を模索する傾向が更に深化したようにすら感じる。加藤理事長の元で我々が強く意識すべき課題はパイオニア精神の再度の醸成であり、世界に冠たる若手育成環境の整備だと個人的には考えている。理事会を通して様々な提言を行い、頑健となった財政を賢く運用して、新たな時代へと舵を切る上でしかるべき役割を担いたいとの思いで副理事長に就任した。

理事に就任して

大江 隆 史

(社会保険等委員会、医療機器開発・管理運用委員会担当)

このたび伝統ある日本手外科学会の理事に就任した大江隆史です。就任に当たって、まず自己紹介をさせていただきます。

私は1985年に東大を卒業し、ただちに東大整形外科に入局しました。当時東大整形外科は故黒川高秀先生が教授に就任された直後で、まだ故津山直一先生の体制が色濃く残っている頃でした。長野昭先生(当時助教授)を中心とする末梢神経の診療が盛んで、ほぼ毎週腕神経叢損傷に対する助間神経移行術の長時間手術が行われていました。大学で1年間の研修医を過ごしたのち、東大の関連病院で6年間、一般整形外科を研修したのち、1992年東大へ助手として帰り、黒島永嗣先生に師事し手外科の研修を初めました。大学の最後の年に医局長の役目が回ってきて、整形外科学術集会を開催するお手伝いをしたのち、晴れて(?)自由の身になり市中病院に出ました。そこは都心から20kmの郊外にある救急病院で、切断指をはじめ手の新鮮外傷が多く来る病院だったので、外傷の修行となりました。切断指再接着は約130指を行い、生着率は90%を少し超えるくらいだったと思います。東大では外部病院に出ても週に半日は大学の専門外来に出て、研修や教育に従事することになっていたのち、大学の外来には23年間継続して出席しました。その中で多くの後輩を手外科に勧誘したことが、業績と言えは業績かも知れません。2015年からは都心にある現在の職場、NTT東日本関東病院(旧、関東通信病院)に移り、郊外とは違った変性を中心とする手外科にいそしんでいます。

手外科を行う一方、2007年から日本整形外科学会が提唱したロコモの啓発と研究にもその初めから関わるようになりました。中村耕三先生の命でロコモ研究のWGを作り、2009年のロコチェックやロコトレの選定に関与しました。2010年には日本整形外科学会のロコモ関連事業を受託するロコモ チャレンジ! 推進協議会が発足し、副委員長に就き、2014年からは委員長を務めています。協議会の仕事はロコモに関して、社会や医学界へのPR(パブリック・リレーションズ)です。PRとは企業や団体が社会との良好な関係を構築していくための様々なコミュニケーション活動を意味し、広報や広告の上位に位置する概念で、双方向です。今回、手外科の学問的業績の乏しい私が理事に推挙された要因は、このロコモのPRに関する業績が評価されたものと考えています。手外科学会で財務委員長などを務めた経験から、専門的で極めて誠実な団体である手外科学会は社会や医学界へのPRには長けていなかったのではないかと感じています。手外科は同じ基盤専門医の上位に位置する心臓血管外科と同程度の認知を得ているとは思えません。手外科のPRなしに社会や医学界での認知や地位の向上は困難です。ロコモでの経験を手外科でも生かしたいと思います。

加藤理事長のスキーのお供以上の貢献ができるよう、手外科のために努力いたします。お見知りおきの上、ご支援よろしく申し上げます。

面川庄平

(編集委員会担当)

この度、日本手外科学会理事を拝命いたしました奈良県立医科大学、手の外科学講座の面川庄平です。日本手外科学会会員の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

私は、昭和60年に奈良県立医科大学を卒業し、同年整形外科教室に入局いたしました。昭和61年に日本手の外科学会に入会し、玉井進名誉教授(当時助教授)のご指導のもと手の外科、マイクロサージャリーの研鑽を行いました。平成3年から6年まで奈良国保中央病院で勤務し、福居顕宏先生、水本茂先生の指導を受け、手の外科の臨床研究に携わりました。平成7年から1年間、アメリカのウエストバージニア大学で日本手外科学会のCorresponding memberでもあるDr. Jaiyoung Ryuに師事して、手指の神経血管解剖、手・手関節のBiomechanics研究に従事しました。その後大阪の八尾総合病院で14年間勤務し、手の外傷を中心に診療と手術を行いました。平成22年に奈良医大に帰学し、平成27年から寄附講座主任として、手外科診療と大学院生の指導、手外科専門医の育成を行っております。

日本手外科学会では平成18年に評議員(現、代議員)を拝命して以来、機能評価委員会、橈骨遠位端骨折ガイドライン委員会、用語委員会、国際委員会メンバーを歴任し、機能評価委員会では委員長を務めさせていただきました。

この度、編集委員会担当理事を拝命しました。谷口泰徳委員長をはじめ編集委員の先生方と協力して、円滑な審査を行い良質なジャーナルの発刊を継続していきたいと存じます。代議員の先生方には、査読業務に関してご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。また昨年度から日本手外科学会創立60周年を記念して創設された日本手外科学会奨励賞(田島達也賞・津下健哉賞)の審査は、編集委員会の重要な業務の一つです。45歳以下の日本手外科学会正会員である若手研究者には、学術集会発表論文に奮って投稿いただくようお願いいたします。

近年、アメリカのみならずアジアへのExchange Traveling Fellowが新設され、手外科の国際交流はますます盛んになっております。日本手外科学会の国際化へのさらなる発展と、日本の若い手外科医の国際進出にも協力していきたいと考えております。

加藤博之理事長のもと、理事、代議員の方々とともに、これまで先輩方の築かれた日本手外科学会のさらなる発展に尽力する所存です。会員の皆様には、今後とも一層のご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

.....

柿木良介

(国際委員会、定款等検討委員会担当)

この4月に、日本手外科学会理事に再任されました近畿大学医学部整形外科の柿木良介です。2年前にはじめて理事を拝命し、この度の再任で理事3年目を迎えます。理事会では、国際担当理事、定款等検討委員会理事を仰せつかっております。

国際委員会は、日本手外科学会に外国学会からよせられた意見、案件を検討する非常に忙しいセッションです。現在日本手外科学会は、米国、香港、韓国の手外科学会とexchange traveling fellowship programを開設しておりますが、来年からは、台湾手外科学会ともこのprogramを開始いたします。各外国学会への日本人留学生の選定、留学生の受け入れ準備、留学生の希望に添った手外科施設の選定、その日程の調整をいたします。その他、国際手外科連合 (IFFSH) やアジア太平洋手外科連合 (APFSSH) へのnational delegateの派遣、国際学術集会への援助と開催、手外科連合事務局運営の援助、学術誌 (Journal of Hand Surgery-Asia Pacific volume) の発刊支援等を行っております。このように多岐にわたる仕事がありますが、いままでに多くの諸先輩方が外国手外科医と良好な関係を築いて頂いていたことと、私自身も留学先のボスのMayo Clinic, Allen Bishop先生、友人のAlex Shin先生、恩師上羽名誉教授関連でWilliam Seitz先生はじめとするCarroll会の先生方、Traveling fellow等で知り合ったJames Chang先生、Jeffery Yao先生、Kevin Chung先生、Scott Duncan先生等の友人のおかげで、外国学会との交渉において、困った事はほとんどありません。国際担当理事になって、今更ながら、友人を作る事の大切さを認識するとともに、諸先輩方の今まで築いてこられた人間関係に敬意を払います。今後ともできるだけ諸外国の手外科医と友好関係を築き、それを日本手外科学会のlegacyとして、次世代に引き渡していきたいと考えております。

定款等検討委員会では、若い活力ある人材を日本手外科学会に導入したいという矢島弘嗣前理事長の肝入りで、一昨年、手外科代議員に定年を設けました。若い先生方の活力で、日本手外科学会がますますactiveな学会へと発展することを希望いたします。日本手外科学会には、日本のみならず、アジアを含む世界の手外科を支援するmissionがあります。このmission遂行のため、日本手外科学会手外科専門医の先生方には、国際手外科連合日本支部、アジア太平洋手外科連合日本支部の会員になっていただくよう、細則の整備をいたしました。手外科専門医の先生方におかれましては、ご負担を強いる事になりますが、どうぞ日本手外科学会の立場をご理解頂き、ご協力をお願い申し上げます。

今後2年間、皆様と与えて頂きました日本手外科学会理事職を全力で全うしたいと存じます。どうぞ今後とも皆様のご協力とご支援をお願い申し上げますとともに、忌憚ないご意見をお待ちしております。よろしくお願い申し上げます。

.....

酒 井 昭 典

(倫理利益相反委員会、学術研究プロジェクト委員会担当)

この度、日本手外科学会の理事を拝命いたしました。二期目になります。大変光栄に存じますとともに、一期目での貴重な経験を糧にして、引き続き重責を果たすべく全力で取り組む所存でございます。

一期目の2年間では、「倫理利益相反委員会」と「学術研究プロジェクト委員会」の担当理事と「情報システム委員会」、「手外科専門医検討委員会」、「医療機器開発・管理運用委員会」、「オンラインジャー

ナル別冊運用委員会」の委員を務めさせていただきました。これら多分野での仕事を通じて、学会の現状や課題が少しずつみえてきましたので、二期目では、問題点の解決と円滑な運営に向けて精力的に取り組んでいきたいと思っています。特に、喫緊の課題である新専門医制度におけるサブスペシャリティ領域専門医としての「手外科専門医」の確立を円滑にできるよう尽力いたします。

学会活動とともに、グローバルおよびローカルに手外科の魅力をアピールしたいと思っています。特に、力点を置きたいことのひとつは、優れた後進の育成です。大学主任教授という立場で、手外科の魅力を学生や研修医に伝えていきたいと思っています。当大学で行っている解剖献体を用いた手外科手術手技研修や地域で開催しているセミナーを通じて、若手が手外科の魅力に触れる機会を数多くつくっていききたいと思っています。手外科の専門性・特殊性を大切にしながらも、多くの関連領域を取り込む学問的な寛容さを大切に、手外科医を志望する若手を増やしていきたいと思っています。

手外科をさらに発展させるためには、技を磨く臨床経験とともにその根拠となる科学的データの蓄積が大切だと考えています。大学の枠を超えて多施設共同研究を行い、未解決の問題を解明するとともに、科学的エビデンスの構築に努めたいと思っています。

以上のような考えをもって日本手外科学会の理事としての業務を誠心誠意遂行し、日本手外科学会のさらなる発展のために骨身を惜しまず働きたいと思っています。引き続きご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

.....

島田賢一

(先天異常委員会、カリキュラム委員会担当)

この度、平成30年度日本手外科学会理事に就任しました、金沢医科大学形成外科、島田賢一と申します。どうぞよろしくお願い致します。日本手外科学会の皆様にご挨拶を申し上げます。私は、昭和63年に富山医科薬科大学医学部を卒業し、金沢医科大学形成外科学教室に入局しました。その後、砺波市立病院形成外科、石川県立中央病院形成外科などの関連施設に赴任、帰局後平成22年に准教授、平成28年から主任教授に就任しました。現在、手外科というまでもなく乳房再建、マイクロサージャリーを用いた組織移植、創傷治癒を専門に北陸で診療、研究に従事しています。

私の手外科との出会いは、入局して間もない頃に当時の手の外科学会に先輩の先生に連れて行っていただいたことでした。手という極度に機能化された局所における、さまざまな疾患とその治療に対してとても興味をそそられました。そして、学会での熱いディスカッションをしている諸先生の姿がとても新鮮でインパクトを受けました。若い形成外科医である自分にとって、「手」は急患等で自身の裁量で扱うことのできる部位であり、論文をひもとき日々の手術を行ううちに、自分のなかで大きな部分を占めていくようになりました。そしてもう一つマイクロサージャリーとの出会いがあり、遊離組織移植にのめり込んでいきました。やがて、その二つが結びついた形で自分の専門分野となりました。

今回、理事に就任させていただき、微力ながら形成外科医として手外科学会に貢献したいと思っております。そして、特に以下の二つの点が重要と考えます。

一つは、整形外科と形成外科の垣根をとりはらい、協力しながらよりよい手外科医の育成を図りたいと思っています。形成外科は「皮膚見て骨を見ず」、整形外科は「骨見て皮膚をみず」と揶揄されますが、骨に対する扱いは整形外科から、軟部組織に対する扱いは形成外科から、お互いの得意な分野を生かし、またそれを互いの知識として定着させ、よりよい再建ができるような手外科医を育成する事、そしてその仕組みを学会として考えて行ければと思っています。

もう一つは、地方における手外科の啓蒙です。現在の手外科専門医の地域分布をみると、大都市偏在が顕著です。医師全体がその傾向にあることが周知の事実ですが、それに拍車をかけて、偏在していると思います。北陸三県では18名(1.9%)が現状です。その現状を鑑み、専門医師の増加と地方における手外科の認知度を上げるために尽力したいと思っております。

本学会のより一層の発展のためには、診療科の垣根を越えた交流と情報交換、より多くの若い医師が手外科に携わるようになることが必須です。そして、形成外科においては手外科への理解と必要性の認知が深まることにより、手外科医の活躍の場が広がることが理想と考えます。一人でも多くの若手形成外科医が本学会の会員となるよう働きかけ、手外科を研鑽したのち専門医を取得し社会に貢献できるよう微力ながら尽力したいと考えます。

最後に、浅学非才の身ですが、本学会の発展に努力する所存です。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

.....

砂 川 融

(教育研修委員会、専門医試験委員会担当)

本年4月の定時総会において前期に引き続き理事に選出させていただき誠にありがとうございます。過去2年間は教育研修委員会、橈骨遠位端骨折診療ガイドライン作成委員会担当理事として活動させていただきました。教育研修委員会では本学会の重要行事である春と秋の研修会の開催と2年に1回のカダバーセミナーを委員長をはじめとする委員の先生方の多大なご支援の元無事成功裏に終えることができました。今期も同様の活動をさせていただきますが、会員の方々からのご指摘など反省点を踏まえ、より有意義な会にさせていただきますと存じます。今回の定時総会でも述べさせていただきましたが、研修会の講師に関しまして会員の先生方からのご推薦をいただければより有意義な会にできると考えておりますので、ご提案がありましたら事務局の方までご連絡いただければ幸いです。橈骨遠位端骨折診療ガイドライン作成委員会は委員の先生方の絶大なご努力により無事発刊することができ、解散となりました。

今期は専門医試験委員会を新たに担当させていただくこととなりました。専門医試験は研修会と並んで学会の公的存在意義を示す重要な事業です。以前、日本整形外科学会専門医試験委員を拝命しておりましたので、その経験を生かして務めさせていただきますと存じます。

今後の2年間ではこれまで混迷を極めています専門医制度が制度として確立されてくることが予想され、それに即した教育研修会、専門医試験に変更していく必要があるかもしれません。学会としての現在の目標である「手外科を標榜科にする」ために臨機応変、迅速な対応をしていきたいと存じます。本会が発展するためには若手医師を多数リクルートする必要がありますが、「手外科を標榜科にする」ことが一つの推進力になると考えています。

本会をこれからの世代にとって魅力的な会にし、発展させることが使命と考えております。会員の先生方のご支援を何卒よろしく願いいたします。

.....

中村 俊 康

(機能評価委員会、情報システム委員会担当)

今回、日本手外科学会の理事となりました国際医療福祉大学整形外科学の中村俊康です。私は昭和63年に慶應義塾大学医学部を卒業後、直ちに同大学整形外科学教室に入室しました。平成2年に慶應義塾大学大学院に進学し、矢部裕教授(現名誉教授)の指導のもと、手関節三角線維軟骨複合体(TFCC)の機能解剖および組織学的研究で学位を取得いたしました。その後、済生会中央病院に出身し、平成7年から名古屋の藤田保健衛生大学医学部坂文種報徳会病院(第2教育病院)整形外科に赴任しました(翌平成8年講師就任)。平成10年から1年3ヵ月間米国メーヨークリニックのバイオメカ研究室へ留学し、Richard Berger教授の指導でバイオカメ研究を、次いで平成11年から1年1ヵ月間米国ニューヨーク州立大学バッファロー校でClayton Peimer教授の元でやはりバイオメカ研究を行い、平成12年に母校に助手として帰りました。平成17年から慶應義塾大学整形外科専任講師となり、平成26年より国際医療福祉大学臨床医学研究センター教授・山王病院整形外科部長、平成29年より国際医療福祉大学に医学部が新設された後、同大学医学部整形外科学教授に就任し、現在に至っています。

これまで大学院時代から一貫して手関節TFCCの基礎および臨床研究を中心に、腱、神経を含む手のあらゆる外傷・障害の治療を行っています。手外科関連では東日本手外科研究会の世話人と今年度から関連研究会としていただいた日本手関節外科ワークショップの代表世話人を務めております。さらに海外学会として平成24年にヨーロッパ手関節鏡学会(EWAS)の会長を、今年11月にはアジア太平洋手関節会議(APWA)の会長を第11回の日本手関節外科ワークショップと併催で務める予定です。

日手会ではこれまで編集委員会委員、機能評価委員会委員長およびアドバイザー、教育研修委員会委員を務めてまいりました。今回、情報システム委員会担当理事と機能評価委員会担当理事を拝命いたしました。日手会の学会参加登録は今年大きく変わったことはお気づきと思いますが、さらにより良いものにしていくようシステム構築を進めてまいりたいと思います。また、機能評価委員会は継続的な事業が重要であり、この7年間委員、委員長、アドバイザーを務めてまいりましたので、内容はよく理解できていると思います。第5版となった日手会機能評価表の継続的な補足改定を担当理事として責任を持って行っていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

信 田 進 吾

(施設認定委員会、用語委員会担当)

このたび、平成30年4月25日の日本手外科学会定時総会におきまして日本手外科学会の理事(計12名)に就任しました。伝統ある日本手外科学会の理事を拝命し、身の引き締まる思いですが、自己紹介ならびに今後の抱負を述べたいと思います。私は1983年東北大学卒業後、国立水戸病院にて臨床研修ののち、東北大学整形外科教室にて末梢神経障害の研究を行って参りました。1989年に日本手の外科学会に入会し、1993年に取得しました学位論文のテーマは「腕神経叢麻痺のF波による電気生理学的診断法と手内在筋機能の予後判定」であります。これまで、手根管症候群、肘部管症候群、尺骨神経管症候群、前骨間神経麻痺、をはじめとする末梢神経障害、肘周囲骨折などを中心に診療と臨床研究を行って参りました。2002年より本学会評議員を拝命し、2009年より2013年まで教育研修委員会委員、2014年より学会誌編集委員会委員を務めて参りました。今回、用語委員会と施設認定委員会の担当理事を務めることとなりますが、前任の委員の方々にご指導いただきながら仕事を進めて参りたいと存じます。今後、新専門医制度におけるサブスペシャリティーとしての本学会会員の専門医の育成、末梢神経障害の電気診断と治療に関する啓蒙活動、整形外科医と形成外科医の垣根を低くして行くにはどうすれば良いか等、検討して参りたいと存じます。

.....

平 瀬 雄 一

(広報渉外委員会、医療安全委員会担当)

日本手外科学会の理事を拝命し、二期目の理事を務めることになりました。一期目と同様に、広報渉外委員会と医療安全委員会を担当します。

今まで、広報渉外委員会では、白井委員長の下に手外科ニュースの作成、手外科シリーズの作成(新規シリーズの作成と過去分の見直し)、学会外からの各種の問い合わせに関する回答などを行ってきました。また、他の学会や医学会連合などからの周知依頼の情報をホームページに掲載して参りました。つまり、学会と会員の間での広報活動が主体であったと思います。しかし、学会設立から60年経った現在も、残念ながら日本手外科学会あるいは手外科診療の一般への啓蒙活動は十分とは言えません。今後は、学会外へ向けての広報、手外科という診療科の広報、とくに社会における日本手外科学会のプレゼンスの向上を大きなテーマにしたいと考えおります。たとえば、患者さまが病院で「手根管症候群」であると診断され、帰宅してからパソコンで手根管症候群について調べた時に、理想的には最初に日本手外科学会の手外科シリーズなどの情報ページが開いて、そこから専門医検索ページで近所の専門医を探すという流れになるべきですが、現状ではそれぞれのクリニックのホームページが最初に開いてしまい、日本手外科学会にはなかなかたどり着けません。このような状況の改善を大きなテーマにし、上手にメディアを利用して日本手外科学会自体を広報したいと思います。手始めに、一般社会における日本手外科学会の認知度調査を行う考えです。その結果から、効果的な広報活動の在り方を委員や会員の皆様と考えていきたいと思っています。

また、医療安全委員会は担当理事以外に委員はおらず、現在は医学会連合からの周知依頼の項目をホームページに掲載することが主な業務です。しばらくはこのスタイルで進めたいと考えております。

さらに男女参画推進などの活動にも積極的にかかわっていきたいと考えております。女性医師の活躍の場を確保するにはどうしたらよいか、あるいは過疎地域での手外科専門医教育の在り方、病気・出産・育児・介護中の先生方の処遇など、現代の日本が抱える問題の多くが日本手外科学会の運営にもかかわってきております。このような問題の解決に理事の一人として会員の皆様の協力を得て、努力していきたいと考えております。

微力ながら、有意義な二期目の理事活動でありたいと願っております。

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

(医) 一輝会 荻原整形外科病院 手外科・スポーツ傷害治療センター長 田中 寿一



この度は、日本手外科学会名誉会員に、ご承認いただき、誠にありがとうございました。身に余る光栄であるとともに、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和44年、大学紛争の真っ只中、東大入試が無い混乱期に鳥取大学医学部に入学し、医者としての学びが始まりました。在学中、広島大生田先生の再接着成功の新聞記事から“手の外科”の存在を知りました。1975年卒業後、神戸大学整形外科入局(柏木大治教室)し、2年目のローテイト病院/神戸労災病院で、S.Bunnell先生の直弟子であるJoseph H. Boyes先生の下で、手外科を研修された藤原 朗先生の指導の下で、手外科治療の基礎を学びました。藤原朗先生のメスさばきは、素晴らしく、自身でメスを握ることがなくても“匠の手術”を見ることができたこの1年は大きな宝となり、手外科医としての“礎”となりました。昭和55年より、西ドイツ留学し、教室の指示の下、手外科専攻に進みました。エッセン大学手外科Koop教授の下で、ドイツ流のおびただしい数の手術症例の下、臨床研修し、さらに、ドイツ語圏の手外科専門施設[10施設]を訪問・研修しました。昭和58年の帰国すぐに兵庫医科大学へ赴任し、私自身の手の外科診療が始まりました。さらに、国内の学会参加はもとより、国際交流の重要性から、国際学会(IFFSH、ASSH、APSFH、ドイツ手の外科学会)へ積極的に参加し、さらに2つのTravelling fellowship(GOTS:1991 / AOA-travelling-fellow1996)で、欧州と全米を代表する手外科施設(大学・研究施設)を訪問・口演してまいりました。この時期の見聞・交流は、私にとって、世界的視野での取り組みを再考するいい機会になり、自身最も大きな糧となりました。これらの経験から、『相手は世界である!』との認識の下、医療器具(DTJ screw / TJ screw system)の開発をし、これによる独自性を持った治療もでき、対外的にも、手外科診療のレベルの高さを示せ、患者への貢献もなしたと思っております。

手外科学会役員会(委員会・理事)では、主に広報委員会を担当し、手外科グッズ(ネクタイ・専門医バッジ・etc.)、パンフレット作成に携わりました、中でも自身作成の手舟状骨骨折版は、リオ五輪の金メダリストの同部の治療に関わったこともあり、自身のLife Workである同治療の中で、決して忘れることの出来ない一枚となっております。

さて、大学での33年間の診療は、最後の砦という自負の下、決して疾患から逃げることなくいつもチャレンジしてきました。このことで、多くの患者と共に喜びを分かち合えたことは我が人生の最大の喜びであります。現在、医師として44年(兵庫医大;33年間)、未だ現役を退くこと無く、一手外科専門医として診療(含手術)を同様のペースでおこなっており、手外科学会にも、まだまだお世話になるようです。

最後に、手外科学会の益々の発展を祈念し、お礼のご挨拶といたします。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

独立行政法人 労働者健康安全機構 浜松労災病院 鈴木 茂彦



この度は伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただきまして光栄に存じます。

私は1977年に大学卒業後、京都大学附属病院に新設された形成外科に入局いたしました。入局翌年に浜松労災病院に形成外科が開設され、初代の形成外科常勤医師として着任しました。卒業して2年目に過ぎない私が職務を全うできたのは、外科と整形外科の先生方の全面的バックアップのおかげです。当時のことで特に記憶に残っている2症例があります。1例は胸部熱傷後癬痕拘縮の女性に対し、外科部長に手術助手をお願いし広背筋皮弁による再建手術を行い好結果が得られ私の初の論文となった症例です。もう1例は、整形外科の先生に当時としては珍しかった二重切断の再接着手術の助手に加えていただき、10数時間かかった再接着に成功し地元のマスコミで大きく報道された症例です。ただ、その後拘縮が強く機能的な手にならないことが分かりむしろこのことが心の奥に残りました。一方数多く診察した重症熱傷症例に関してはチーム医療を行うことで現在と変わらない治療成績を得ることができましたが、超広範囲熱傷患者を救うことができず限界を感じました。これらのことがモチベーションになり、癬痕の制御と皮膚の再生が生涯の研究テーマになりました。日手会総会における私の初めての発表も手の癬痕拘縮の治療に関する新しい手術法です。

京大に戻り、形成外科専門医を取得し大学院に入学した頃、切断指再接着に携わっていたので、同級生の石川浩三先生（現大津赤十字病院長）に勧められて日手会に入会しました。大学院生としての主たる研究テーマは皮弁血行と虚血再灌流障害でしたので、当時はほとんど報告のなかった切断肢の阻血再灌流障害に関する研究成果を日手会で発表しました。従の研究テーマについては人工真皮の開発と製品化に成功し、指尖部欠損の機能的整容的再建に用いることができるようになったことで多少は手外科に貢献できたかと思います。さらに塩基性線維芽細胞増殖因子の徐放可能な新規人工真皮が、今年4月に製造承認がおりましたのでさらに使いやすくなると思います。

私が日手会評議員に推薦されたのは10数年前、香川大学の形成外科形成外科教授に就任して間もない頃です。その後、京大へ戻ってからは、整形外科と形成外科の両科にまたがった手外科認定施設の責任者を務めさせていただきました。そろそろ教員に評議員職を譲ろうと思っていた頃に専門医制度改革の激動時期に入り、予期せず理事、副理事長に就任させていただくことになり、最後の2年は理事会アドバイザーを務めさせていただきました。

この度定年で代議員を退き特別会員にご推挙いただきましたが、これまでに会員の皆様方にいただきましたご厚情に厚く御礼申し上げます。日本整形外科学会と日本形成外科学会の土台に乗った本学会がさらに発展を遂げ、国民から広く認知された学会になりますよう願っています。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

広島大学長 越 智 光 夫



このたび伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただき、大変光栄に存じます。私は膝関節外科を専門としてきましたが、手外科こそ医師としての原点であるといっても過言ではありません。

さて私が手の外科に携わるようになったのは、恩師の津下健哉先生がおられた広島大学整形外科学教室に入局を決めたことがきっかけです。外部の病院を3年間回って1980年に帰局した際、私は脊髄の硬膜外の陰圧に関する実験をしようと考え、リサーチのアイデアを持って帰りました。しかし、津下先生からは「手の外科の実験をするように」と勧められました。当時、教室では手外科や末梢神経の抄読会が行われていました。末梢神経に関しては、川崎医科大学から帰られて形成外科診療班を組織された宮本義洋先生がモルフォロジーを中心にシュワン細胞の動向の実験をされていました。

津下先生の勧めもあって、私は末梢神経の実験をすることになりました。スウェーデン・ルンド大学のルンドボルグ先生の行った実験について聞き、もっと定量的に神経の再生を評価できないかと考えました。

当時、腕神経叢麻痺の治療は黎明期で、肋間神経移行術を用いた肘の屈曲再建が主体でした。断裂例には腕神経叢部を展開した神経移植が行われ始めたころです。体性感覚誘発電位(SEP)を利用した診断の研究も開始されていましたが、私はMRIが診断にどのくらい効果的に使えるのかを調べました。

1983年から1年間、ウィーン大学のハンノ・ミレッシィ先生の下に留学し、手術を見学させてもらいました。その後、イタリアのパビア大学に移りました。津下先生が私の実験論文をあらかじめ世界的な先生方に渡して下さっていたおかげもあって、欧州滞在中にルンドボルグ先生から「一緒にリサーチしないか」と、ルンド大学に招待をいただきました。

ルンド大学では屈筋腱の治癒の実験や末梢神経の実験など6つを行いました。どれもうまくはいかなかったものの、それ以上に、ものの考え方や実験のアイデア、そのアイデアをどう実験に落とし込んでいくかなど多くのことを学ぶことができ、大きな財産になったように思います。

欧州から帰ってきて、生田義和教授の下で腕神経叢麻痺と膝関節外科の「二足のわらじ」を履くことが許されました。その後、徐々に膝に重心を置くようになりました。顧みれば、手の外科の実験の経験が膝関節外科の実験を組む上で大いに参考となり、アイデアを膝にシフトすることもできました。その意味で、私の原点は手外科であり、手外科を学ぶことでものの考え方が広がったと思っております。患者さんに役立つ医療を考え続けることの大切さを背中であげてくださいました津下先生。改めて感謝しつつ、机上に飾ってある写真の中の先生と対話する毎日です。

日本手外科学会の今後益々のご発展を祈念して、お礼の言葉とさせていただきます。

平成30年度 各種委員会委員

●常設委員会

財務委員会

担当理事 平 田 仁
委員長 山 本 真 一
委員 金 潤 壽 富 田 一 誠 中 道 健 一 原 章
別 所 祐 貴

教育研修委員会

担当理事 砂 川 融
委員長 金 谷 耕 平
委員 大 野 義 幸 川 崎 恵 吉 坂 本 相 哲 島 田 賢 一
中 村 俊 康 成 島 三 長 村 田 景 一

編集委員会

担当理事 面 川 庄 平
委員長 谷 口 泰 徳
委員 池 口 良 輔 池 田 全 良 江 尻 荘 一 岡 田 貴 充
長 田 伝 重 河 村 健 二 佐 藤 和 毅 関 谷 勇 人
峠 二 村 昭 元 一 古 川 正 宏 西 田 圭 一郎 西 田 崎 浩 徳
松 村 一 村 瀬 剛 森 谷 浩 治

機能評価委員会

担当理事 中 村 俊 康
委員長 洪 淑 貴
委員 池 田 純 越 後 歩 多 田 薫 山 本 真 一

国際委員会

担当理事 柿 木 良 介
アドバイザー 稲 垣 克 記
委員長 服 部 泰 典
委員 岡 田 充 弘 金 谷 文 則 建 部 将 広 平 田 仁
村 田 景 一 吉 田 綾

広報渉外委員会

担当理事 平 瀬 雄 一
委員長 白 井 久 也
委員 大 江 隆 史 岡 崎 真 人 岸 陽 子 佐 竹 寛 史
辻 英 樹

社会保険等委員会

担当理事 大江隆史
アドバイザー 池上博泰
委員長 亀山真
委員 岩瀬嘉志 島田賢一 高瀬勝己 鳥谷部莊八
光安廣倫 森田晃造

先天異常委員会

担当理事 島田賢一
委員長 橋本一郎
委員 上里涼子 四宮陸雄 関敦仁 鳥山和宏
牧野仁美

倫理利益相反委員会

担当理事 酒井昭典
アドバイザー 塚田敬義
委員長 恵木丈
外部委員 深谷和子 山我美佳
委員 鈴木克侍 辻本律 福本恵三

学術研究プロジェクト委員会

担当理事 酒井昭典
アドバイザー 仲沢弘明
委員長 高木誠司
委員 釜野雅行 鈴木茂彦 藤岡宏幸 村松慶一

専門医制度委員会

担当理事 加藤博之
委員長 田中克己
委員 朝戸裕貴 面川庄平 亀井讓 酒井昭典
砂川融 平田仁 三上容司 矢島弘嗣

専門医資格認定委員会

担当理事 亀井讓
アドバイザー 中尾悦宏
委員長 石河利之
委員 加地良雄 國吉一樹 黒川正人 児玉成一
高木岳彦 野口政隆 黒松井雄一郎 松村一
横田淳司

施設認定委員会

担当理事 信田進吾
委員長 副島修
委員 長田龍介 川勝基久 岸陽子 森田哲正
和田卓郎

専門医試験委員会

担当理事 砂 川 融
アドバイザー 佐 野 和 史
委員長 田 中 利 和
委員 池 田 和 夫 清 川 兼 輔 小 林 由 香 篠 原 孝 明
鳥 山 和 宏 長 尾 聡 哉 南 野 光 彦 西 田
古 川 洋 志 山 崎 宏

カリキュラム委員会

担当理事 島 田 賢 一
委員長 加 地 良 雄
委員 石 河 利 広 大 井 宏 之 坂 野 裕 昭 松 田 健
吉 本 信 也

情報システム委員会

担当理事 中 村 俊 康
委員長 西 浦 康 正
委員 大 江 隆 史 面 川 庄 平 柿 木 良 介 加 藤 博 之
亀 井 讓 吾 酒 井 昭 一 島 田 賢 一 砂 川 融 仁
信 田 進 吾 橋 本 弘 平 瀬 雄 平 田
宮 脇 剛 司 矢 島 弘 嗣

用語委員会

担当理事 信 田 進 吾
アドバイザー 後 藤 涉
委員長 加 藤 直 樹
委員 鳥 谷 部 莊 八 原 友 紀 松 浦 佑 介 松 田 健
湯 川 昌 広

●特別(臨時)委員会

定款等検討委員会

担当理事 柿 木 良 介
委員 麻 田 義 之 射 場 浩 介 亀 井 讓 楠 原 廣 久

オンラインジャーナル別冊運用委員会

担当理事 平 田 仁
アドバイザー 酒 井 昭 典
委員 岩 崎 倫 政 垣 淵 正 男 坪 川 直 人 中 島 祐 子
牧 裕

医療機器開発・管理運用委員会

担当理事 大江 隆 史
アドバイザー 岩 崎 倫 政
委員長 池 上 博 泰
委員 稲 垣 克 記 岩 本 卓 士 酒 井 昭 典 森 谷 浩 治

手外科専門医検討委員会

委員長 田 中 克 己
委員 朝 戸 裕 貴 池 上 博 泰 面 川 庄 平 加 藤 博 之
亀 井 讓 酒 井 昭 典 島 田 賢 一 鈴 木 茂 彦
砂 川 融 原 田 繁 平 田 仁 三 上 容
矢 島 弘 嗣

監事紹介

垣 淵 正 男 佐 藤 和 毅

平成30年度理事会メンバー（2018年7月29日、定例理事会（名古屋）にて撮影）



前列左から、垣淵監事、亀井副理事長、加藤理事長、平田副理事長、砂川理事、佐藤監事
後列左から、矢島前理事長、大江理事、面川理事、柿木理事、信田理事、平瀬理事、中村理事、坪川第63回会長、
稲垣第61回会長、岩崎第62回会長

女性医師支援 WG 始動

— 大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会に参加して —

筑波大学 整形外科 原 友 紀

昨年、日本手外科学会に“女性医師支援ワーキンググループ”が立ち上がり、堀井恵美子先生(名古屋第一赤十字病院 整形外科部長)を委員長に、中川夏子先生(兵庫県立加古川医療センター リウマチ科部長兼整形外科部長)、長尾由理先生(京都桂病院 形成外科部長)、原 友紀(筑波大学医学医療系整形外科講師)の4名で活動を開始致しました。今回、堀井恵美子先生(日本整形外科学会の代表も兼任)と原の2名で“大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会”に参加させて頂きましたのでご報告致します。

この連絡会は、2006年から活動を開始した日本医師会女性医師支援センターの主催で年1回行われている連絡会です。日本医師会・日本医学会の会長および女性支援担当者をはじめ、各都道府県の医師会の理事、全国の大学、日本医学会に所属する各学会の男女共同参画・女性医師支援担当者が一堂に会し、それぞれの活動報告と意見交換を行う場となっています。その内容をご紹介します。まず日本医師会から女性医師バンクの活動報告<https://www.jmawdbk.med.or.jp/>、女性勤務医を対象としたアンケート調査結果の報告がありました。アンケートの集計結果を「働き方」と「子育てとの両立」を軸に解析し、現時点における問題点を抽出していました。大学での取り組みとして、先駆的な活動を行っている岡山大学と自治医科大学から報告がありました。岡山大学では県と連携し、女性医師の復職支援やキャリア支援制度が本格的に運用され、女性医師の活躍として実を結んでいる様子が紹介されました。医学会からの報告では、日本内科学会と日本外科学会の取り組みが報告されました。日本内科学会男女共同参画WGは2012年に発足し、女性評議員の増員や、各委員会に女性委員を含めること、座長や講演者に女性を積極的に登用することなどを学会に要望し、実現してきたこと、男女共同参画シンポジウムの開催、新専門医研修制度における育児・介護等に関する特別措置の要望などが紹介されました。一方、日本外科学会では、アンケート調査による女性医師の現状の把握、専門研修にける休止期間に関する取り決め、e-Larningによる復職支援が紹介され、遠隔医療における女性医師の活躍の可能性についても言及されていました。

これらの報告を拝聴して、大学と学会では女性支援に対する役割が異なっており、連携することで相乗効果があるのではないかと思います。また、外科分野における女性支援は特に課題が多く、その難しさも実感しました。連絡会への参加は、日本手外科学会における女性医師支援を考える上で、大変参考となりました。

今後、日手会女性医師支援WGは、まず女性会員の現状と課題を把握するためにアンケート調査を実施し、具体的活動を開始する予定です。ライフイベントを乗り越えて女性医師がスキルアップすることは、今後の日手会の発展に寄与できるものと考えております。WGの活動にご理解とご指導を賜りたく、宜しくお願い致します。

会の後、懇親会があり、日整会の代表で参加されていた鉄永倫子先生(岡山大学)と広島大学の代表で参加されていた中島祐子先生にお会いすることができました。こういった横のつながりも大切にして活動して参りたいと思います。



写真左から鉄永先生、中島先生、堀井先生、原(懇親会場にて)

女性会員アンケート調査結果報告

女性医師支援ワーキンググループ

(中川・長尾・原・堀井)

はじめに

日本手外科学会(日手会)は日本整形外科学会(日整会)、日本形成外科学会(日形会)を基盤学会とするサブスペシャリティの学会であり、会員数約3400名で、女性会員の割合は11%である。女性会員の74%は日整会を基盤とし、25%は日形会を基盤としている。外科系学会としては女性比率も比較的高いが、基盤学会の専門医取得後に専門性を追求してキャリアアップをはかる時期が、出産・育児などのライフイベントとも重なることなどから、女性会員の直面する問題は多いことが考えられる。

2017年春に、女性医師支援ワーキンググループ(WG)が発足し、活動を開始した。まずは女性会員の状況を把握するためにメールによるアンケート調査を行った。アンケートの内容は、主に労働状況のバックグラウンドの把握と、手外科専門医取得・学術集会参加・travelling fellowに関してである。

アンケート回答者基本情報

女性会員397名のうち、メールを送付でき、かつ有効回答の得られたのは99名(25%)であった。ほぼ同じ時期に、日整会が女性会員に対するアンケート調査を行っており、これと重複したこともあり、有効回答数が低かったと考えられ、残念であった。

回答者の約80%は整形外科医で、20%が形成外科医であった。年齢層としては30代40代の層が約80%を占めていた。手外科研修に関しては、大部分は、大学からの派遣・あるいは研修先が研修指定病院であったことがきっかけとなっていたが、積極的に国内留学したという回答者が5名いた。現在の仕事内容に関しては、'60%以上が手外科関連の仕事である'という回答者は25%程度で、手外科関連の仕事は30%以下、あるいは休職中(5名)という回答が55%をしめ、サブスペシャリティを維持しながらも、幅広い診療活動をしていることがうかがえた。

手外科専門医に関して

専門医取得者は28名おり、そのうち16名は、取得に当たっては資格獲得に困難なことはなかったと回答した。資格取得困難であった点に関しては、3年間の指定研修施設での勤務(6名)、業績(学会・論文)獲得(4名)、秋季研修会参加(3名)、手術症例数(2名)をあげていた(複数回答あり)。どうしてこれらの資格獲得が困難であったかの理由として、研修施設に就職できない、出産育児の時期とかさなったが各5名いた。

専門医資格の更新を行った回答者は20名いたが、うち1名が更新困難であったと回答し、その理由としては、学術集会参加が困難で症例数も不足であったと回答した。

資格未取得者 69名のうち、専門医取得予定者は38名であり、31名は専門医を取得しないと回答した。取得しない理由は、取得困難(25名)、資格継続困難(9名)などとともに、11名が取得の利点を感じられないという現実的な回答をした(複数回答)。**図1**に資格条件のうち困難と考えられる項目を示した(複数回答)。さらに一步踏み込んで、なぜ困難かの理由について尋ねた(**図2**)。認定施設での研修が困難(就職できない)であり、したがって手術症例や業績の蓄積が難しいというのが明らかとなり、認定施設に勤務できるかどうかがかギとなっているようである。また、資格取得時期が出産・育児の時期と重なる(21名)、専門医試験を受けにくい(試験場に託児所がない・休暇をとれない)と訴える回答もあった(複数回答)。これらの訴えは、すでに専門医となっている回答者にとっても資格獲得時の大きなハードルであったことから、手外科をサブスペシャリティとして専攻したくとも、半数は専門医獲得をあきらめていることが想像される。

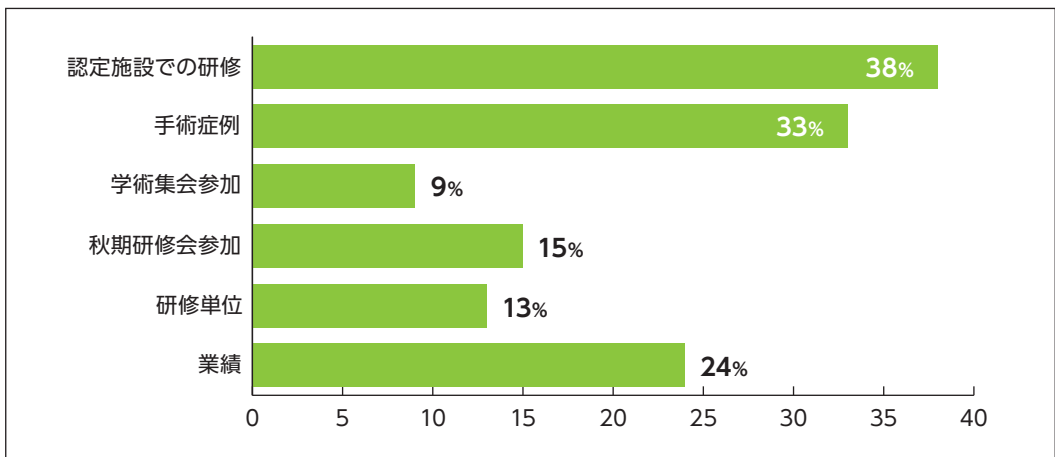


図1 専門医資格条件で困難な項目

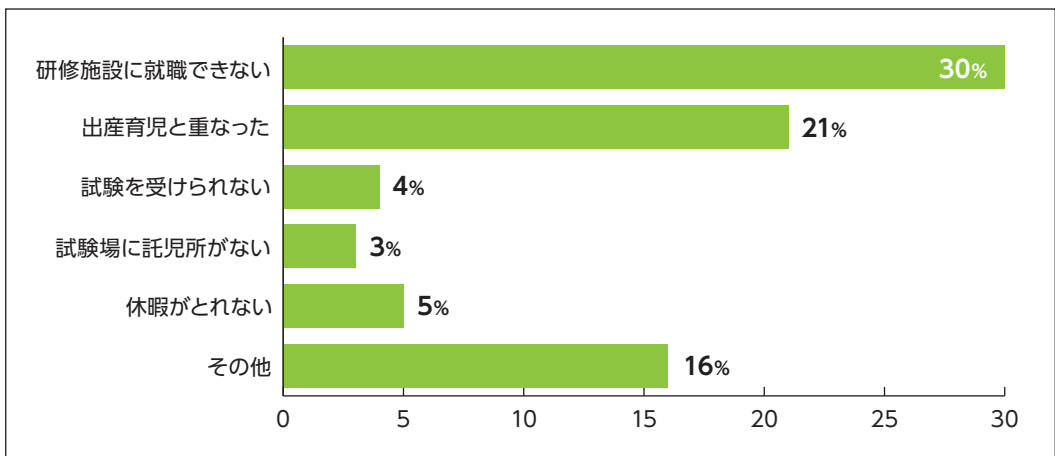


図2 専門医取得困難な理由

日手会学術集会について

学術集会への参加頻度については毎年参加が49%、隔年参加が21%、3～4年に1回あるいはほとんど参加できないが各々15%であった。参加できない理由は図3に示したように、職場、家庭それぞれの要因が見られた。

日手会での託児サービスの必要性については88%が必要と回答したが、実際に託児サービス利用経験者はわずか4%であった。利用経験が極めて低い要因としては、託児サービスが常設ではないこと、事前のアナウンスが不十分であったり、近隣施設の紹介のみであるなど利用しにくい状況が考えられる。60%の回答者が一部自己負担でも託児サービスの整備を望んでおり（無償化の希望は26%）、託児サービスの整備は今後の急務と考えられる。

日手会におけるシンポジスト・パネリスト・研修講演経験者は21%、座長経験者は11%であった。一定比率での女性座長採択については、9%が強く要望、19%がもう少し採択して欲しいと回答したが、大部分は現状を受け入れているようであった。

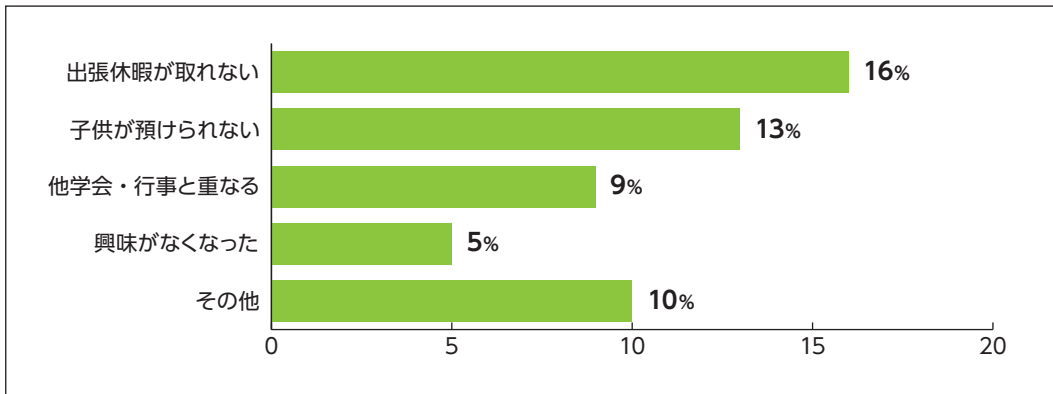


図3 日手会学術集会へ参加困難な理由

Traveling fellowに関して

日本手外科学会では、若手医師を対象に公募により選考されるtravelling fellow制度がある。ASSH-JSSH travelling fellowの応募資格は45歳まで、JSSH-HKSSHおよびJSSH-KSSH Exchange Traveling Fellowは40歳以下を対象としている。Travelling fellowで海外の多くの手外科の施設を見学する機会が得られ、世界に多くの同士を持つことができるなど、臨床・研究において手外科医としての幅が広がる好機となりうる。現在まで女性の会員の参加はASSHでは36名中2名、JSSH-HKSSHでは18名中1名である。この現状を踏まえ、今回のアンケートでTravelling fellowに関する5つの質問を盛り込んだ。

Travelling制度の認知について、ASSHについては59%、HKSSHについては44%が知っていると回答した。それぞれのfellowとして参加したいかとの質問では、約半数が「興味がない」と回答し、「参加したい」がそれぞれ15%、11%、「参加したいが困難」と答えた人はASSH 37%、HKSSH 38%であった。参加の希望はあるが応募が困難な理由については図4に示した。派遣時期や派遣期間が長いこ

とで家庭の都合を合わせられないなど「家庭」が原因と回答した方が49%にのぼり、次に「職場」の休暇がとれない:32%、「医局」の問題が6%であった。その他の理由として「年齢制限」「応募できる実力がない」などが挙げられた。年齢制限については、女性医会員の場合、子育てが一段落して再び仕事に打ち込める年齢になった頃には応募年齢を超過していることが考えられる。

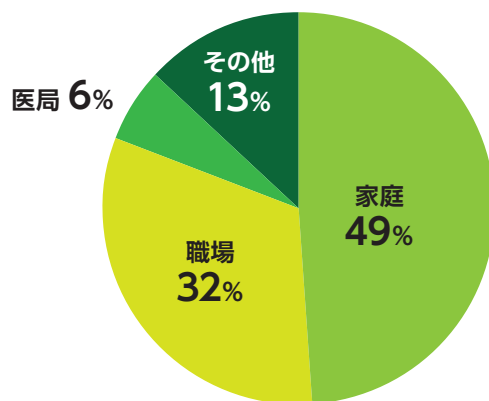


図4 Travelling Fellow応募困難な理由

Travelling fellowに選ばれることは手外科医としての登竜門であり、努力・実力で勝ち取るものだと思う。しかしながら、家庭・職場がキャリアアップのハードルとなっている会員が存在することは明らかとなった。これは女性に限ったことではなく、男女共同参画の立場から、妊娠・出産以外にも疾病や介護によりキャリアにブランクがある場合、年齢制限に配慮する制度となることを期待する。

その他

日手会の女性会員割合は11%であるが、女性代議員割合は4%であることに関しては、女性会員は若い人が多いこと、専門医取得をあきらめている人が多いことなどを理由としてあげており、現時点で会員数に比例した女性代議員の選出を希望する回答は18名のみであった。

おわりに

アンケートの回収率は低いものの、いくつかの問題点が明らかとなってきました。将来的には、外科系女医の増加は必然であり、日手会が他学会に先駆けて女性会員の問題に取り組んでいくことは、日手会の発展に有益であると考えています。WGは2019年度には正式に委員会として承認を受ける予定で有り、これら問題点の解決に向け、具体的な活動を開始していきます。アンケートに回答いただいた会員の先生方、アンケート集計にご尽力いただいた日手会事務局の皆様へ深謝します。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第24回秋期教育研修会◆

会 期：2018年9月1日(土)～2日(日)
会 場：金沢商工会議所会館
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

◆第62回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2019年4月18日(木)～19日(金)
会 場：札幌コンベンションセンター
会 長：岩崎 倫政(北海道大学大学院医学研究院 機能再生医学分野 整形外科学教室)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jssh2019/index.html>

.....

◆第25回春期教育研修会◆

会 期：2019年4月20日(土)
会 場：札幌コンベンションセンター

.....

◆第25回秋期教育研修会◆

会 期：2019年8月31日(土)～9月1日(日)
会 場：北海道立道民活動センター [かでの2・7]

.....

◆第4回カダバーワークショップ◆

会 期：2019年8月28日(木)～29日(金)
会 場：札幌医科大学

関連学会・研究会のお知らせ

◆第29回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2018年9月7日(金)～8日(土)
会 場：海峡メッセ下関
会 長：神田 隆(山口大学大学院医学研究科 神経内科学講座)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/jpns29/>

.....

◆第27回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2018年10月18日(木)～19日(金)
会 場：京王プラザホテル(東京・新宿)
会 長：仲沢 弘明(日本大学医学部形成外科学系形成外科学分野)
詳 細：<http://procomu.jp/jsprs2018/>

.....

◆第33回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2018年10月11日(木)～12日(金)
会 場：奈良春日野国際フォーラム 麓～I・RA・KA～、東大寺総合文化センター
会 長：田中 康仁(奈良県立医科大学整形外科学教室)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/joar2018/>

.....

◆第11回日本手関節外科ワークショップ・アジア太平洋手関節会議◆

会 期：2018年11月10日(木)～11日(金)
会 場：千葉県成田市
会 長：中村 俊康(国際医療福祉大学医学部整形外科学)

.....

◆第45回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2018年12月6日(木)～7日(金)
会 場：大阪国際交流センター
会 長：五谷 寛之(大阪掖済会病院 静岡理工科大学 手微小外科先端医工学講座)
詳 細：<http://www.c-linkage.co.jp/jsrm45/>

.....

◆第29回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2018年12月14日(金)～15日(土)
会 場：ウインクあいち(愛知県産業労働センター)
会 長：和田 郁雄(名古屋市立大学大学院整形外科学)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/jpoa2018/>

.....

◆第36回中部日本手外科研究会◆

会 期：2019年1月26日(土)
会 場：京都府民総合交流プラザ 京都テルサ(京都府京都市)
会 長：柿木 良介(近畿大学医学部 整形外科)
詳 細：<http://www.acplan.jp/jssh36chubu/>

.....

◆第33回東日本手外科研究会◆

会 期：2019年2月2日(土)
会 場：朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)
会 長：坪川 直人(新潟手の外科研究所病院)
詳 細：<http://admedic.jp/ejssh33/index.html>

.....

◆第40回九州手外科研究会◆

会 期：2019年2月16日(土)
会 場：長崎大学医学部 記念講道館・良順会館●
会 長：田中 克己(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 展開医療科学講座 形成再建外科学)

.....

◆第31回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2019年2月8日(金)～9日(土)
会 場：グラントパーク小樽
会 長：和田 卓郎(北海道済生会小樽病院 整形外科)
詳 細：<http://convention-w.jp/elbow2019/index.html>

.....

◆第24回日本形成外科手術手技学会◆

会 期：2019年2月23日(土)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：前川 二郎(横浜市立大学医学部形成外科学)
詳 細：<http://jsitps24.umin.jp/>

編集後記

今年の夏の猛暑は半端でない厳しさですが、会員の皆様は健やかにお過ごしでしょうか。4月27日に稲垣克記会長の日本手外科学会が無事終了し、新理事の顔ぶれが決まりこの号外で報告しています。その後6月18日に震度6の大阪府北部地震が生じ、小学校のプール塀が倒れて学童が死亡する痛ましい出来事がありました。震源近くに在住の筆者は他人ごとではありませんでした。さらに7月豪雨で岡山、広島県などでは甚大な被害を生じ、現在も復興途中です。日手会会員の皆様が無事であられることを祈念しています。過去を振り返りますと2011年3月11日の東日本大震災では4月開催を控えていた弘前での日本手外科学会がweb会議となり、過去初めて学会中止の英断がなされました。大災害にいつでも対応できるよう日手会としては会員の現状把握を早急に行える連絡網が必要かもしれません。

日手会会員の11% (397名) が女性で、女性医師支援ワーキンググループが2017年に発足しています。女性へのアンケート調査では専門医取得困難、資格継続困難者が多いことや日手会会期中の託児所問題が浮上しました。この方面にも新理事会で打開策が協議されていくものと思われます。加藤博之新理事長からは手外科学会が専門医機構へ手外科専門医申請をいよいよ秋に行うとの記載があります。天災と同じで他人ごとではなく、1代議員、1正会員として手外科専門医が公に認められることを期待いたします。

(文責：白井久也)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，委員長：白井久也)

委員：大江隆史，岡崎真人，岸 陽子，佐竹寛史，辻 英樹